2012年度　景観・デザイン委員会　第１回親委員会

議　事　要　旨

日時：2012年7月18日（水）　17:00～19:00
会場：土木学会 E・F会議室
出席者（敬称略）：
＜委員＞天野委員長、高村委員、屋代委員、福井委員、石井委員、関委員、上島委員、高橋委員、松井委員
＜委員兼幹事＞佐々木幹事長、水谷幹事、横山幹事、沖田幹事、大波幹事、福島幹事、上田幹事

議題：
１）委員長挨拶（天野委員長）
２）新旧委員および委員兼幹事紹介
３）各小委員会活動報告および平成24年度の活動について
　・研究発表会・シンポジウム（水谷幹事）
　・デザイン賞・デザイン賞についての議論WG（福島幹事）
　・デザイン賞10周年記念事業（福井委員）
　・防災・復興（佐々木幹事長）
　・その他の活動
４）H23会計報告・H24予算案（沖田幹事）
５）土木学会による委員会活動評価等について（上田幹事）
６）その他
　・土木学会100周年記念事業
　・土木学会誌新連載について
　・論文賞等推薦の予定について
　・その他の親委員会としての活動内容について

資料：
・会議次第
・資料１　委員・幹事リスト（取扱注意）
・資料２　各小委員会活動報告（２－１研究発表会　２－２デザイン賞　２－３防災・復興）
・資料３　H23会計報告・H24予算案
・資料４　委員会活動評価と予算について・変更点・H23自己評価内容
・資料５　百周年記念事業意見募集
・資料６　学会誌新連載に関するご協力について
・資料７　論文賞等推薦予定

議事：

１　委員長挨拶

（天野委員長）昨年は震災があり、急遽日大で研究発表会を行ったが、今年は東北大で開催する。景観と防災・災害は裏腹の部分があり、震災以降発言しにくい雰囲気もあったが、そろそろきちんと発信していきたいと思っている。
景観を学んで大学を出た学生が、民間で景観の仕事で給料をもらえるにはどうしたらいいのか、ここ５年くらいずっと考えている。
委員会としては、発表会・シンポジウムがきちんと続いており、実績を重ねることができている。デザイン賞は 11 回実施してきているが、毎年実施することのつらさも見えてきている状況である。これからも、学会として、風景についてなにを発信していくか、若い人を中心に考えていってほしい。

２　新旧委員および委員兼幹事紹介

・各委員自己紹介を行った。
（佐々木幹事長）小委員会等も含めたくさんの人に関わってもらっており、慢性的に人不足の状況。委員・幹事が長きに渡っている方には恐縮だが、引き続き協力をお願いしたい。

３　各小委員会活動報告および平成 24 年度の活動について

１）研究発表会

・上島委員・水谷幹事より資料２－１について報告された。
（上島委員）１日目の基調講演の講演者について検討が必要である。11/30 のシンポジウムについては防災・復興小委員会と一緒に議論してきて、概要が固まりつつある。
また、復興関係の論文が投稿されるよう、関係者への声かけをお願いしたい。
（佐々木幹事長）11/30 のシンポジウムは防災・復興小委員会でリードしながら検討したい。広報についても研究発表会とは切り離して、一般の人への公開を想定したものとしたい。

２）デザイン賞

・福島幹事より、資料２－２について報告された。
（佐々木幹事長）事後報告となるが、親委員会の下にデザイン賞検討 WG を立ち上げることを委員会として承認したい。
（各委員）異議なし。
（福島幹事）WG のメンバーだけですべて決めるということではなく、検討のための作業部会としてフットワークの軽い組織を設け、関係者にヒアリングしながら改善案を提示していくことを考えている。歴代の委員や応募者など、立場や時代によってかなりさまざまな意見が出されることが想定される。現委員や担当者内だけでも多くの意見が出されている。
可能であれば課題整理や改善案の検討状況を研究発表会で口頭発表し、それに合わせてアンケートをするなど、広く問題意識を共有する場を設けたい。資料 p16、22 のメモは、現審査委員や幹事からの意見として取り扱う予定。
（石井委員）当初から「隔年でいいのでは」という意見はあったが、やってみよう、ということで始めた。大きな目的として、土木デザイナーの名前を出す、土木技術者の活躍を明示するとい

うことがあったと思っている。
（天野委員長）初回の時に「来年もやる」と言ってしまったことから続いてきたと記憶している。資料 p18 にあるシミュレーションはかなり想定が甘い印象であり、WG で十分検討してほしい。自分が参加している研究企画委員会で、協賛金から管理費を徴収するのをやめてほしいと発信している。これからも言っていきたい。小粒の賞を設けていくという考えもあってよい。
（石井委員）もう少し一般向けに公表していきたい。鞆の浦のような活動を評価する別の賞があってもいい。
（佐々木幹事長）あまり対象を広げると、都市景観大賞や手づくり郷土賞との違いがわからなくなっていくことが懸念される。
（福島幹事）広報については、担当の幹事を増やし、facebook・twitter などでの活動を始めている。しかし、賞自体が内向きとの印象を持っている人が多く、内輪で表彰しあっているという印象が応募のモチベーションを下げているという意見も聞いている。応募のハードルを下げたいが、質を担保する事も大事。そのバランスを考えていきたい。
（天野委員長）建設コンサルタンツ協会を通じてデザイン賞をプロポーザルでの評価対象にするよう働きかけするなども重要である。
（松井委員）建設コンサルタンツ協会へは、機会があるたび働きかけはしているが、国土交通省などは「そんなのあるんですか」という反応が多い。重要な取組と思うが、じっくりと５年くらいのスパンでとらえて PR を考えていきたい。
デザイン賞に応募している立場から言うと、講評されるのがうれしい。２人からの講評が活字として残るのはとても良い。一方、落選した場合は理由を問い合わせてよい、となっているが、実際はなかなか聞けるものではなく、モチベーションが下がる。
また、受賞の条件である「トータルで質が高い」というのはとても難しいことであり、「計画は良かった」「この部分は良かった」など、ポイント賞みたいなものがあってもいい。
（福島幹事）以前は落選作品には理由を送付していた。現状について確認しておきたい。
（天野委員長）「ポイント的な表彰」として、奨励賞を位置付けた。そういう経緯が現在の委員に十分伝わっていないのではないか。
（福島委員）選考委員が替わることで評価が変わるのは必ずしも悪いことではないが、選考の哲学まで変わってしまっているのではないか、という指摘はこれまでもされている。「いいもの」に対する不文律のようなものが引き継がれていないという課題認識はある。
（高村委員）建築では委員会レベルの賞というのは考えられない。外から見ると、委員会で賞が与えられるということはすばらしいことと感じる。
JIA の新人賞は、選考料は非常に高いがみんな応募する。受賞することのメリットさえ示せれば、応募は来るのではないか。たくさん賞を出す、というのは逆の発想ではないか。
（佐々木幹事長）土木との風土の違いも感じる。賞を取ったことが直接仕事につながらないなら出してもしょうがない、と思われている現状がある。
（石井委員）審査員によって審査基準が変わってもいいという認識なのか。
（天野委員長）評価の視点が変わることはあってもいいが、「奨励賞の意味」など根本的なことは変わってはいけない。
（石井委員）「この人が審査員だから応募しよう」ということもあるかもしれない。
（福島委員）各評価委員の評価に関する考え方になどについては、毎年発信しているが、十分応

募者に伝わっていないのではないか。
（高橋委員）造園学会の作品選集に関わったことがあるが、同じような議論があった。学会賞の一部門である作品賞は権威があり、審査も厳しいので、該当者なし、という年もある。推薦者が必要で、応募者にはかなりの資料を提出させる。作品選集は２年に１回発行する。作品選集が発刊される年にはその中から学会賞の推薦をする場合もある。
選集作成は、刊行委員会と選考委員会に分かれている。刊行委員会で書類審査、現地調査等を行い、資料をまとめて、選考委員会で掲載の有無を検討する。応募作品のうち毎回 30 編程度が掲載される。
審査は３万円、見開き掲載で 10 万円、掲載クレジット１人につき１万円となっており、１件に 15 万円くらいかかる。高いので、商業誌に出した方が良いという人もいるが、コンスタントに応募はある。選集は市販されないが、4000 部程度印刷する。会員に配布した余部は、大学の研究室などで学生用にまとまって購入されているが、赤字ではあるので、学会本体が補助している。原則、作品選集刊行事業は独立採算を求められている。
現在 20 年くらい経過したが、10 号では節目の鼎談を行った。建築・土木・都市計画も含め「デザイン、ってどういうもの？」などを議論し、造園の職能の位置づけを話し合った。他分野の人も交えながら議論の幅を広げ、外部の力も入れてブレイクスルーを図るのもいいのでは。
（佐々木幹事長）本日の意見も参考に、来年のデザイン賞の時期を目標に時間を区切りつつ、WG での議論を進めてほしい。

・福井委員より、資料２－２（フォトコンテスト）について報告された。
（福井委員）実施中に震災があり、こんなことをしている場合か、という雰囲気にもなったが、ともかく実施した。全 109 作品のうち、６割くらいに応募があった。本当はもっと子供たちに出してほしかったが、なかなか響かなかった。
今後、集めた作品をどう活かすか、という議論がペンディングになっている状況である。写真のニーズはある。グリーティングカードやカレンダーなどのアピール材料として価値が高いことはわかっているが、システムとしてどう活用するかが課題である。
（関委員）検討中のコンテンツ作成について、作品の DVD を作る、ということであればすぐに始められる。コンテンツの内容について議論を深める必要があるか。
（佐々木幹事長）そんなに大きな予算ではないので、まず作ってみることにしたい。早急に進めてほしい。

３）防災・復興
・佐々木幹事長より資料２－３について報告された。
（佐々木幹事長）3/29 のリレートークのまとめがＷＥＢに掲載されているので是非閲覧いただきたい。今年度の活動は未定の部分が大きいが、11/30 のシンポジウムに向けた議論は進めていく。

４　H23 会計報告・H24 予算案
・沖田幹事より、資料３について報告された。

５　土木学会による委員会活動評価等について

・上田幹事より、資料４について報告された。
（上田幹事）活動評価の変更に伴い、情報発信数のみの評価となる。近年はＡ評価が続いていたが、現在の活動状況では、場合によってはＣ評価となる可能性もある。また、行事では管理費率が変更になり、今年度のデザイン賞の収支状況では赤字となる恐れがある。
（佐々木幹事長）小さな努力の積み重ねとなるが、行事・イベント等で人を集める工夫をしていく必要がある。
（福井委員）出版物は市販されるものでないと対象とならないのか。デザイン賞の選集のように流通のないものも、学会活動の目的には合致しており、「出版物購読者数」に含められるよう協議したい。

６　その他
・佐々木幹事長より資料５について報告された。（土木学会 100 周年記念事業）
（佐々木幹事長）必ず提案しなければならないわけではないが、せっかくなので、100 年の風景の変化についてアーカイブを残すような企画を提案したいと思っている。
（松井委員）例に掲載されている HANDS+EYES は似た取組みではないか。
（佐々木幹事長）100 周年の中でも力を入れている事業であり、HANDS は古い事例、EYES は新しい事例を取り上げている。これは作品が中心なので、町並みなど、風景は入ってこない。
（天野委員長）土木史委員会との連携で提案できることもあるかもしれない。幹事を中心に検討いただきたい。
（松井委員）以前に GROUNDSCAPE 展で作成した模型は活用できないか。
（福島幹事）残念ながらほとんどの作品は既に処分している。

・佐々木幹事長より資料６について報告された。（土木学会誌への委員会の協力）
（佐々木幹事長）誌面をしっかり確保して、委員会の紹介を連載することにしている。本委員会としても協力することとしたい。

・佐々木幹事長より資料７について報告された。（論文賞等の推薦）
（佐々木幹事長）D1 編集委員会からは D1 の論文を推薦することとし、本委員会としてはその他も含めたものから推薦するようにしたい。
（上田幹事）推薦締め切りが 10 月 1 日であり、9 月には候補者に通知できるよう、準備を始める必要がある。

・新任委員等からの意見・フリートーク
（松井委員）土木デザインについて、社会のニーズは確実に高まっていると感じるが、仕事として発注される機会は壊滅といってもよいぐらい減少した。時代状況という背景も有ると思うが、要因の一つに発注者が相談する相手を失っている状況があると認識している。コンプライアンスの観点で、コンサルタントに相談しにくい状況があり、自ずと相談相手が大学の先生になってしまっているような気がする。また、コンサルタント側も発注者に働きかけてもコンプライアンスの観点から受注に結びつくことが困難であり、アプローチすることもめっきり減ってしまった。コンサルタント業務は、発注者と特記仕様書等に基づく契約によって仕事が動くので、仕様を定

義しづらいデザインの仕事はそもそも生まれにくい状況にある。そういった状況を変えていきたい。
（佐々木幹事長）最近発注者支援業務などが言われるようになっているが、実態はどうか。
（松井委員）その業務は多分、人材派遣的なものを指していると思うので、今の話の趣旨とは少しずれると思う。一方、発注者組織に対して、コンサルタントの組織として、相談を受ける仕組みを模索しているコンサルタントもあると聞く。
（天野委員）委員会としてそういう活動をけん引するのは重要である。どうしたら仕事として作っていけるか、コンサルタントのメンバー等を中心として検討してほしい。具体的なアイデアがあれば、アプローチ先を考えていくことができる。
（佐々木幹事長）柔軟に WG 等を立ち上げてほしい。
（高村委員）いくつかの学会に幹事として関わってきているが、この活動を非常に新鮮に感じている。企業への還元や社会への貢献を考えていることがすばらしい。予算について議論されるのも意外だった。
（高橋委員）造園の仕組みは土木とよく似ていて、親和性が高い。以前から土木の人ともっと接するべきと思っていた。土木はデザイン教育の機会が少ないと感じており、ワークショップなどで議論を深めていければ有益だと思う。共催のイベントなども、学会の壁にとらわれず、協働していきたい。100 周年事業について議論があったが、外に発信する力としては、東京駅全面オープンを活用して、東京都を巻き込んでイベントを打てると良いのではないか。あのエリアは地下水位が高く、土木技術が深くかかわっている。
（佐々木幹事長）土木学会は、造園でいうところの造園学会と造園施設業協会が合体したような組織であり、そこが大きな違いであると思う。近隣分野の意見は大変貴重であり、デザイン賞検討 WG にも必要に応じて参画いただければ大変ありがたい。今後もどうぞよろしくお願いします。

以　上